キスの日　2021/5/23　Unnamed Memory　（古宮九時）

ファルサス城の一角、高い吹き抜けのあるホールは、普段は建物間を繋ぐ場所として使われている。円筒状の壁には隣の建物に繋がる階段が二つあり、地上の扉は別の建物に繋がっている。いわば建物と建物の間に立っている、巨大な空洞の柱だ。

そこを歩いていた王は、ふと高い天井を見上げて、そこを泳いでいる魔女に気づいた。

彼女は天井からつるされた豪奢な照明に触れている。黒い魔法着がたなびいて、優美な魚のようだ。

「ティナーシャ、何してるんだ？」

「照明の修理ですー。職人さんが怪我で来られなくなったそうで代わり」

「なるほど？」

本来であれば、職人が命綱をつけてやる仕事だが、代わりに浮遊できる魔女に頼んだ人間はなかなか肝が据わっている。ティナーシャはちょうどそこで作業が終わったのか、ゆっくりと空気を孕みながら降りて来た。その姿をオスカーは、目を細めて見上げる。

孤独で、美しい塔の魔女。

その存在を気にし続けていたのは昔からだ。彼女を塔から下ろせたのは僥倖だった。

城に連れてこられるようになって数か月、あわよくば妃になって欲しい、と思っているが、彼女には今のところその気はないらしい。自由に泳ぎ回る魚を、手で掴みとりたい、と思っているようなものだろう。

そんな彼女はオスカーのすぐ上まで降りてくると、小さなガラスの破片を摘まんで見せる。

「ほら、これ」

「なんだそれ」

「硝子操作の構成でひび割れを塞いんだんです。そしたらなんか余った」

「余るのか……」

「欲しいならあげますよ。子供はきらきらしたものが好きでしょう？」

「五歳児じゃないんだが」

それでも彼女がくれるというなら欲しい。それに、王である自分にこんなことを言うのも彼女だけだ。ガラスの破片を受け取り、ティナーシャの手を取って引くと、彼女はくすくすと笑う。

「あとで好きな形に加工してあげます。魔法も入れてあげましょうか？」

「子供じゃないというのに」

「知ってます」

魔女はそう囁くと、ふわりと顔を寄せ、ついばむように彼に口付ける。

オスカーが目を丸くしている間に、ティナーシャは再び宙に浮かび上がった。自由に、楽しそうに中空を泳ぐ。

「なんなんだ、あれは……」

捉えどころのない恋人に微笑して、王は彼女に手を振るとホールを後にする。

手の中のガラスは、子供の思い出のように輝いていた。